【論文】

章学誠の著述観（下）

渡邉　大

概要：本稿は、章学誠の主著である『文史通義』『校讎通義』からその著述観について考えようとするものである。前号掲載の上篇においては、章学誠が六経皆史説とともに唱えていた古人不著説は、後代における個人の著述を否定するものではないこと、『文史通義』は著述のあり方について、『校讎通義』は学術のあり方について、体系的・通時的に考察するものであること、それらはいわば校讎学的思考ともいうべきものに支えられていたということ、また、章学誠の校讎学的思考は『漢書』藝文志の研討によって培われたものであることなどを指摘した。

今号掲載の下篇においては、章学誠の校讎的思考は、義理・考拠・詞章が対立していた当時の学術のあり方に対しても向けられていたこと、道の展開、道の一端として、個人の著述が位置づけられていたこと、著述の条件として個人の性情と一家言が重視されたこと、章学誠が手がけた地方志編纂においてもそのような主張を実践すべく意図されていたこと、章学誠の学術史における意義は「辨章学術」「考鏡源流」という立場から学術史・著述史を総括しようとした点にあるということを明らかにした。

キーワード：章学誠　文史通義　校讎通義　目録学　著述観

六、義理・考拠・詞章

章学誠の校讎的思考法は、当時の学問のあり方に対しても向けられていた。所謂「義理」「考拠」「詞章」の対立である。この問題は夙に程頤によって「古之學者一、今之學者三、異端不与焉。一曰文章之學、二曰訓詁之學、三曰儒者之學。……今之學者有三弊。一溺於文章、二牽於訓詁、三惑於異端。欲趨道、捨儒者之學不可。」（二程遺書巻十八）と提起されていたが、清代になって、戴震（一七二四～一七七七）の「古今學問之徒、其大致有三。或事於理義、或事於制數、或事於文章。事於文章者、等而末者也。」（與方希原書）などの発言をきっかけに、それぞれの立場から盛んに議されるようになったものである[1]。これに対し、章学誠は次のように述べている。

學問之道、有流有別。尚考證者薄詞章、索義理者略徵實。随其性之所近而各標獨得、……必欲各分門戸、交譏議則義理入虚無、考證徒爲糟粕、文章祇爲玩物。……惟自通人論之不然。考證即以實此義理而文章乃所以達之之具。……往僕以讀書當得大意、又年少氣鋭、專務渉獵、四部九流、泛覽不見涯涘、好立議論、高而不切、攻排訓詁、馳騖空虚、蓋未嘗不然、自喜以爲得之。獨怪休寧戴東原振臂而呼曰「今之學者、毋論學問文章、先坐不曾識字」。僕駭其説、就而問之。則曰「予弗能究先天後天、河洛精蘊、即不敢讀『元亨利貞』。弗能知星躔歳差、天象地表、即不敢讀『欽若敬授』。弗能辨聲音律呂、古今韻法、即不敢讀『關關雎鳩』。弗能考三統正朔、『周官』典禮、即不敢讀『春王正月』」。僕重愧其言。因憶向日曾語足下所謂「學者祇患讀書太易、作文太工、義理太貫」之説、指雖有異、理實無殊。近從朱先生游、亦言甚惡輪雋後生枵腹空談義理、故凡所指授、皆欲學者先求徵實、後議擴充。所謂不能信古、安能疑經、斯言實中癥結。僕則以爲學者祈向實有專屬。博詳反約、原非截然分界。

（学問の道には流別が存在しています。考証を尊ぶ者は詞章を軽んじ、義理を求める者は実証を疎かにします。それぞれが持ち前の近いところにしたがって独自に獲得したものを標榜し、……門戸を張って互いに謗り、義理は虚無に入り、

考証はいたずらに糟粕をなし、文章はただ玩物をなすのみ、などといいあうものです。……ただ通人の論だけは異なっています。考証は義理を確かなものにし、文章はそれを届けるための手段とするのです。……かつて私は読書は大意を得なければならないと考えており、年若く血気盛んでもあったため、もっぱら渉猟につとめては四部九流を乱読して際限なく、議論を好んでは高所にたつのみで精切でなく、訓詁を排撃して空虚を疾駆するばかりでした。いつもそのような調子でしたが、自分では満足し、それでよいとおもっていました。ただ腑に落ちずにいたのは、休寧の戴東原が、「今の学者は学問にしても文章にしても、まずもって文字を識ろうとしない」と喧伝していたことです。私はその説に驚いて問うてみたところ、「私は、先天後天、河図洛書の精義を究めないうちには、易の『元亨利貞』など読もうとはおもわない。天体の運行、天象地理を理解しないで書の『欽若敬授』を読もうとはおもわない。音韻・音学、古今の韻律を辨じるまでは詩の『関関雎鳩』を読もうとはおもわない。三統の正朔、周礼の典礼を考察せずに春秋の『春王正月』を読もうとはおもわない」とのことでした。私はその発言に慚愧の念をいだかずにはおれませんでした。そしてかつて貴方と語ったところの、「学ぶ者はただ読書が安直であること、作文が技巧に走ること、義理が堅牢であることを憂える」ということばをおもいだしたのです。内容に違いはあるものの、理屈は同じものです。近頃、朱筠先生のところにおりますが、先生は、軽薄才子の後学が中身もなく義理を語ることを嫌って、その指導は学ぶ者にまず実証を求め、その後、拡充していくという方法をとっておられます。古を信じられなければ経を疑うこともできないという発言は実に病根をついたものです。私がおもうに学ぶ者は専門を求めるべきだということです。博学多識と帰納反約とは、本来截然と判別できるものではないのです。

（與族孫汝楠論學書）

ここには、義理を根本に据えながら、その追求、表象のためには、考証と詞章とをともに必要とするという章学誠の折衷的態度が明確に示されている。錢穆は名著『中國近三百年學術史』において「實齋著述最大者、爲文史・校讎兩通義、近代學者、亦率以文史家目之。然實齋著通義、實爲箴砭當時經學而發、此意則知者甚尠。」と述べ、章学誠の学問を当時の経学に対する反

撥ととらえている。また、余英時は、それをうけてのことであろう、「他（章学誠）以『文史』爲範囲而與『經學』相抗、以『校讎』爲方法而與『訓詁』相抗。戴震由訓詁而通經以明『道』、章氏則代之以由校讎而通文史以明『道』。」（『論戴震與章学誠』増訂本、三聯書店、二〇一二年、もと、一九七六年）と述べ、その対象をさらに戴震の訓詁に絞り込んでいる。上文にみたように、章学誠自身が章学誠の主張に疑問を抱いていたのは間違いないし、『文史通義』朱陸篇が戴震を念頭において書いたということを章学誠は後年自ら述懐していることからしても、錢余両者の説は肯わざるを得ない点もあるが、次に挙げる一文からは章学誠は一概に訓詁（また考証という手法）を否定しているわけではないということも紛れもない事実であることが確かめられよう。

後儒途徑所由寄、則或於義理、或於制數、或於文辭、三者其大較矣。三者致其一、不能不緩其二、理勢然也。知其所致為道之一端、而不以所緩之二為可忽、則於斯道不遠矣。徇於一偏、而謂天下莫能尚、則出奴入主、交相勝負、所謂物而不化者也。是以學必求其心得、業必貴於專精、類必要於擴充、道必抵於全量、性情喩於憂喜憤樂、理勢達於窮變通久、博而不雜、約而不漏、庶幾學術醇固、而於守先待後之道、如或將見之矣。

（後儒の方途には、義理においてするもの、制数（考拠）においてするもの、文辞（詞章）においてするものがあり、三者はその代表である。三者のうち一を用いれば、他の二者が等閑になるのは理勢の当然である。その致すところが道の一端に過ぎないことを知り、等閑にしている二者をあなどらなければ道において遠からずということになる。一端に偏ったまま、天下にはこれ以上つけ加えるべきものはないと考えるのであれば、門戸の見に固執して対立しあうことになる。物にとらわれて変化できないということである。そこで、学問は心得を求め、事業は専一を貴び、門類は拡充を要し、道は全量に達し、性情は憂喜憤楽によって喩り、理勢は窮変通久に達する。博にして雑ならず、約にして漏せずであってこそ、学術は純粋、堅固となって、先聖の教えを守り、後学を待つという点において、理想の人物に出会えたということになる。）

（博約下）

また、そのこととともに忘れてはならないのが、博学・多識よりも専門・反約（帰納）を尊重する章学誠の立場である。専門と反約とはともに章学誠の校讎的思考と密接に関連するものであるこというまでもないが、ここでは特に章学誠が各人が有すべきとする専門をそれぞれの性情と結びつけていることに注目したい[二]。

夫學有天性焉、讀書服古之中、有入識最初、而終身不可變易者是也。學又有至情焉、讀書服古之中、有欣慨會心、而忽焉不知歌泣何從者是也。功力有餘、而性情不足、未可謂學問也。性情自有、而不以功力深之、所謂有美質而未學者也。

（そもそも学問には天性というものがあり、読書服古に際して最初に感得され、終身変わることのないものがそれである。学問にはまた至情というものがあり、読書服古に際して、欣然と心に適い、忽焉として涌き起こる感情が何によるものか分からないものがそれである。いくら努力しても性情が不足していれば学問ということはできない。性情があったしても努力によって深めなければ、美質にして未だ学ばざるものということになる。）　（博約中）

このほかにも、「高明者多獨斷之學、沈潛者尚考索之功、天下之學術、不能不具此二途。譬猶日昼而月夜、暑夏而寒冬、以之推代而成歲功、則有相需之益。以之自封而立畛域、則有兩傷之弊。（高明な者には「独断」の学問が多く、沈潜な者は考証の功績をとうとぶ。天下の学術はこの二つの方途を備えないわけにはいかない。それは日が昼を月が夜を照らし、夏暑く冬寒いことで時が流れ年がおわるようなもので、互いに必要とすることで効果があがるのだ。自ら境界を設けて譲らなければ、ともに弊害が生じてしまう。）」（答客問中）など、章学誠は、各自の性情にあわせた学問のあり方と、義理・考拠・詞章に代表されるさまざまな学問のあり方について相補的な作用とを繰り返し主張する。次に引く、尊徳性と道問学との対立についての見解はそのような章学誠の思考の面目躍如たるところとみてよいだろう。

宋儒有朱陸、千古不可合之同異、亦千古不可無之同異也。末流無識、爭相詬詈、與夫勉爲解紛、調停兩可、皆多事也。然謂朱子偏於道問學、故爲陸氏之學者、攻朱氏之近於支離。謂陸氏之偏於尊德性、故

爲朱氏之學者、攻陸氏之流於虚無。各以所畸重者爭其門戸、是亦人情之常也。

（宋儒には朱陸の異同があるが、これは永遠に一致することのない違いであり、また、永遠になくならない違いである。末流はそれが分からずに、互いに罵りあったり、無理に折り合いをつけて両者を仲裁しようとするが、どちらも余計なことである。とはいいながら朱子は道問学に偏っているために陸学は朱子をばらばらだと批判するし、陸氏は尊徳性に偏っているために朱子学は陸氏は虚無に陥っていると批判する。それぞれが偏向によって互いに門戸を争うのも人情の常ではある。）　（朱陸篇）

このような章学誠の態度には考拠一辺倒であった当時の学風に対する危惧があったことはいうまでもない。それは、考拠に走る学者たちの、自らの性情に対する無反省に対する危惧であるとともに学風の循環に対する無理解に対する危惧でもあった。

天下不能無風氣、風氣不能無循環、一陰一陽之道、見於氣數者然也。所貴君子之學術、為能持世而救偏、一陰一陽之道、宜於調劑者然也。風氣之開也、必有所以取、學問文辭與義理、所以不無偏重畸輕之故也。風氣之成也、必有所以敝、人情趨時而好名、徇末而不知本也。是放開者雖不免於偏、必取其精者、為新氣之迎。敝者縱名為正、必襲其偽者、為末流之托。此亦自然之勢也。而世之言學者、不知持風氣、而惟知徇風氣。

（天下には風気がないわけにはいかず、風気は循環せずにはいられない。一陰一陽の道が季節の循環となって現れるのもそのためである。尊ぶべき君子の学問が世道を維持するため偏向を正すのは、一陰一陽の道が調剤において効力があるようなものである。風気がひらかれるには、必ず重点を置くところがあるもので、学問、文辞、義理のいずれかに偏重せざるを得ないのであるが、風気ができあがれば必ず弊害が生ずる。人情として時勢に趨き流行を追うものだが、末流に従い、大本を理解しない者が現れる。これを解放する者はやはり偏向を免れないが、きっとその精髄を獲得して新たな風気を呼び込むのである。弊害をなすものは正統を求めながらその過ちを襲って末流の託すところとなる。これもまた自然の成り行きである。世の学を論じる者は、

風気を持すことを知らず、ただ風気に従うことを知るのみである。）　（原学下）

章学誠が、学問における性情と風気の循環とを重視したことは、学術の変遷を必然不可避のものとし、諸学を折衷相補的視点でとらえる校讎的思考から説明できるであろう。とはいえ、このような思考法は、ひろく理解されるものではなかった。そのこと自身章学誠も十分理解はしていたが、時には自得し、時には不平を漏らしていた。そのことを示す文章をそれぞれあげて本節の結びとしたい[三]。

近刻數篇呈誨。題似説經、而文實論史。議者頗譏小子攻史而強説經、以爲有意爭衡、此不足辨也。戴東原之經詁可謂深矣、乃譏朱竹垞氏本非經學、而強爲『經義考』以有爭名、使人啞然笑也。朱氏『經考』乃史學之流、劉班『七略』『藝文』之義例也。何嘗有爭經學意哉。且古人之於經史、何嘗有彼疆此界、妄分孰輕孰重哉。小子不避狂簡、妄謂史學不明、經師即伏孔賈鄭、祇是得半之道。『通義』所爭、但求古人大體、初不知有經史門戸之見也。

（近刻の数編を差し上げます。題目は経を説くようでありますが実際は史を論ずるものです。論者たちは私が史学を専攻しながら無理に経を説いたものと謗り、意をもって論争するものととらえておりますが、それは言うに及ばぬことです。戴震の経書に対する造詣は深いものですが、朱彝尊が経学を本業としないにも関わらず、しいて『経義考』をなし、経の名を冒そうとしたなどというのはお笑いぐさです。朱氏の『経義考』は史学の流れであって、劉歆『七略』や班固『漢書』藝文志の義例を汲むものである。どうして経学に挑もうとする意などありましょうか。さらにいえば古人は経史において境界を設けたり軽重をつけたりなどしたものでしょうか。狂簡の評をおそれずに妄言させてもらえば、史学が不明であれば、経学上の師がたとえ伏生、孔安国、賈逵、鄭玄のような碩学であったとしても、道の半ばまでしか得ることはできないでしょう。私の『通義』が争うものはただ古人の大概であって、経だの史だのといった門戸の見などはじめから持ち合わせてはいないのです。）

（上朱中堂世叔書）

史之大原、本乎『春秋』。『春秋』之義、昭乎筆削。筆削之義、不僅事具始末、文成規矩已也。以夫子「義則竊取」之旨觀之、固將綱紀天人、推明大道。所以通古今之變而成一家之言者、必有詳人之所略、異人之所同、重人之所輕、而忽人之所謹、繩墨之所不可得而拘、類例之所不可得而泥、而後微茫杪忽之際、有以獨斷於一心。及其書之成也、自然可以參天地而質鬼神、契前修而俟後聖。此家學之可貴也。

（史の大本は『春秋』に求められる。『春秋』の義は筆削において明らかになる。筆削の義とはただ事柄の顛末を列序するだけでなく、文章によって規範を示すということである。夫子が「義は則ち竊に取る」と仰った趣旨からすれば、もとよりそれは天人を綱紀し大道を推明するものであった。古今の変遷に通じて一家の言をなそうとするものは、必ず人の忽せにするところを詳細にし、常識に異見をもち、軽んぜられるところを重視し、人の謹むところを忽せにし、規範や類例の埒外にあるものに拘泥し、しかるのちに茫漠として捉えがたい境地において、一心をもって「独断」する。その書物が完成するや天地にならび鬼神に質し、前例に合致し、後聖を俟つ。これが家学の尊ぶべきものである。）

（文史通義・答客問上）

七、著述の意義とあり方

『文史通義』原道下を引く。

上古結繩而治、後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察。夫文字之用、為治為察、古人未嘗取以為著述也。以文字為著述、起於官師之分職、治教之分途也。……夫道備於六經、義蘊之匿於前者、章句訓詁足以發明之。事變之出於後者、六經不能言、固貴約六經之旨、而隨時撰述以究大道也。太上立德、其次立功、其次立言、立言與立功相準。蓋必有所需而後從而給之、有所鬱而後從而宣之、有所弊而後從而救之、而非徒誇聲音採色、以為一己之名也。……訓詁名物、將以求古聖之跡也、而侈記誦者、如貨殖之市矣。撰述文辭、欲以闡古聖之心也、而溺光採者、如玩好之弄矣。異端曲學、道其所道、而德其所德、固不足為斯道之得失也。記誦之學、文辭之才、不能

不以斯道為宗主、而市且弄者之紛紛忘所自也。宋儒起而爭之、以謂是皆溺於器而不知道也。夫溺於器而不知道者、亦即器而示之以道、斯可矣。而其弊也、則欲使人舍器而言道。夫子教人博學於文、而宋儒則曰「玩物而喪志」。曾子教人辭遠鄙倍、而宋儒則曰「工文則害道」。……義理不可空言也、博學以實之、文章以達之、三者合於一、庶幾哉周孔之道雖遠、不啻累譯而通矣。

（上古は結縄によって治めていたが、後世の聖人はそれにかえて文字を用いた。百官はそれによって統治し、万民はそれによって明察になった。そもそも文字の用途は、統治のため、明察のためのものであり、古人は著述などなさなかったのである。文字をもって著述をなすことは、官師治教が分離したためにおこったのであった。……そもそも道は六経に備わるものであるから、そこに含蓄された六経以前の義については、章句訓詁によって明らかにできる。〔しかしながら〕状況が変化した後の時代については六経は言及することができない。そこで六経の主旨を約取して時勢に応じて撰述し、大道を究めることが尊ばれるのである。太上は立徳、その次は立功、その次は立言とされており、立言は立功に準ずるものである。おもうに何事もまず必要があってそれに応じて供給され、鬱屈するところがあって宣明され、弊害があって救済するのであって、〔立言は〕ただ勝手に声を張り上げ身を飾って自身の名声のためにするものではない。……訓詁、名物は古の聖人の事跡を求めるものであるが、記誦に富む者はまるで貨殖の市場のようになってしまう。著述、詞章は古の聖人の心を闡明するものであるが、彩りに溺れる者はまるで玩物に堕してしまう。異端曲学の徒はその道とするところを道とし、その徳とするところを徳とするため、もとより斯学の得失を論じるにたらない。記誦の学や文辞の才は斯道の宗主としないわけにはいかないのに、それを市場や玩物に堕してしまう者は紛々として本来を忘れてしまっているのである。宋儒が起こると、そのような輩と論争をして器に溺れて道を忘れるものとみなした。器に溺れて道を忘れるということが、また、器によって道を示すというのであれば問題はない。しかしその弊害がおこって器を捨てて道を論じさせようということになってしまった。夫子は博く文に学べと仰っているにも関わらず、宋儒はそれを玩物喪志という。曾子は修飾によって文辞を遠くに及ぼし卑俗を避けようとしたのに、宋儒は巧み

な文章は道を損なうという。……義理は空言すべきではなく、博学によってこれを実証し、文章にこれを表現し、三者が一体となることで、周公の道は遠いとは言いながら解釈を重ねてそれに到達できることが期待されるのである。）

すでに上篇においても見たところではあるが、ここでは、六経以前の道のあり方は訓詁を通じて理解することが出来るが、六藝はあくまでも先王の政典であり、時代の変化には対応できない、そこで時に応じて撰述をして道を追求していくほかないと語られている。戴震以来の義理・考拠・詞章の問題を調停しつつ、個人の著述が積極的に認められるとともに、その意義が六藝同様、治道におかれていることもいうまでもない。このほかにも、「近日學者風氣、徵實太多、發揮太少、有如蠶食葉而不能抽絲。（近頃の学者の風気は実証が多すぎて、発揮が少なすぎる、まるで蚕が桑の葉を食べも糸を紡げないようなものである）」（與汪龍莊書）などと個人の著述に対する肯定的発言は多く見られる[四]。そしてその際、重視されるのが、これまでの諸引用から明らかなように、他でもない、著者自身の発明・自得・独断なのである。著述はだれにも成り代わることのできない、今、ここにいる、自分自身による一家言でなくてはならないのである。そのため、たとえば、考証学の先蹤として当時ひとかたならぬ尊敬を集めていた王応麟（一二二三～一二九六）の業績について、章学誠は、「王伯厚氏搜羅摘抉、窮幽極微。其於經傳子史、名物度數、貫串旁騖、實能討先儒所未備。其所纂輯諸書、至今學者資衣被焉。（王応麟の資料探求操作は微に入り細を穿つ精確なものである。経伝子史、名物制度、いずれにおいても、首尾一貫かつ縦横無尽で、先儒のなしえなかったものを研討しえている。その纂輯した諸書は今に至るまで学者を裨益している。）」（博約上）と高く評価する一方で、「然王氏諸書、謂之纂輯、可也、謂之著述、不可也。謂之學者求知之功力、可也、謂之成家之學術、則未可也。（しかし王氏の諸書は纂輯とはいえるが、これを著述ということはできない。学者が知を求める努力とはいえるが、一家の学というには及ばない。）」（同上）として、著述とは認めないのであった。一家言とはいうまでもなく『史記』太史公自序にもとづくことばであるが、それまでにはなかった自身の見識を示すことであろう。島田虔次はそこに「陽明

学の思いがけない発露」を見出しているが、その見識こそ、章学誠が史学において欠くべからざるものと考えている心術なのであろう[五]。そしてそのような姿勢はやはり自身の性情にしたがった専門への潜心とともに、道に対する全面的帰依（諦観？）とでもいうべきものから生まれてきたと考えられるのである。

八、まとめ

章学誠にとってあらゆる著述は誰にもなりかわれない著者の自己表現であると同時に不可知なる道の一端でもあった[六]。であればこそ、「愚之所見、以爲盈天地間、凡渉著作之林、皆是史學。（私の考えでは天地の間を満たすもの、およそ著作の林にわたるものは、みな史学である。）」として、『史籍考』が「包經、兼采子集（経を包みこみ、子や集を兼收）」するものとして企画されたのであった。また、「文人之有年譜、前此所無。宋人爲之、頗覺有補於知人論世之學、不僅區區考一人文集已也。蓋文章乃立言之事、言當各以其時。……前人未知以文爲史之義、故法度不具、必待好學深思之士、探索討論、竭盡心力、而後乃能彷彿其始末焉。（文人に年譜を作成するということはこれより以前にはなかったことである。宋人がこれを作ったのは、知人論世の学に大きな貢献をなすものであり、その意味はただ一人の文集を考察するだけのものにはとどまらない。文章とは立言のことであり、立言はそれぞれの時代をもってなされるものである。先人は文が史であるという意義をしらず、方法も確立されていなかったため、好学深思の士による探求討論、潜心尽力によって、ようやくその顛末が彷彿とされるというものであった。）」（韓柳二先生年譜書後）、「人物之次、藝文為要。近世志藝文者、類輯詩文記序、其體直如文選。而一邑著述目錄、作者源流始末、俱無稽考、非志體也。今擬更定凡例、一倣班志、劉略、標分部匯、刪蕪擷秀、跋其端委、自勒一考、可為他日館閣校讎取材、斯則有裨文獻耳。（「地方志において」）人物についで芸文は重要である。近世の芸文を記録するものは、詩文や記序を蒐集する際に、『文選』のような体裁を採用している。地方志における著述目録は、作者の源流も伝記も考察することができず、志の体をなしていない。いま仮に凡例を定めるとするならば、ひたすらに劉向班固に従って、分類を設け、取捨をおこない、提要と評価を附して、他

日の史館による取材に備えるべきであり、そうしてこそ文献を裨益することが可能となるのである。）」（修志十議）など[七]、年譜の意義について、知人論世、つまり、個人の立言と時勢の変化を知るよすがとすべきだという主張、また、地方志にも劉歆・班固にならって目録をもうけ、それとは別に詩文のアンソロジーを編むべきだという主張からは、そのことが実践においても心がけられていたことが看取できる[八]。以下に引く二例は章学誠が従事した地方志についてその方針と意義を述べたものである。やはりそこには彼の校讎的思考が看取できよう。

凡欲經紀一方之文獻、必立三家之學、而始可以通古人之遺意也。倣紀傳正史之體而作「志」、倣律令典例之體而作「掌故」、倣『文選』、『文苑』之體而作「文徴」。三書相輔而行、闕一不可。合而為一、尤不可也。……古無私門之著述、六經皆史也。後世襲用而莫之或廢者、惟『春秋』『詩』『禮』三家之流別耳。紀傳正史、『春秋』之流別也。掌故典要、官『禮』之流別也。文徴諸選、風『詩』之流別也。

（一地方の文献を整理しようというのであれば、かならず三家の学を立てなければならない。そうしてはじめて古人の遺志に通じることができるのである。正史紀伝体にならって「志」を作ること、律令典礼にならって「掌故」を作ること、『文選』『文苑英華』にならって「文徴」を作ること。三書は相補って機能するものであり、ひとつが欠けてもいけない。合して一つにするのはもっとよくない。……古には私門の著述というものはなく、六経はすべて史官による記録であった。後世に伝わって、滅びることのなかったものは、ただ『春秋』『詩』『礼』の流れを汲むもののみであった。紀伝体による正史は『春秋』の流れである。掌故典要は『礼』の流れである。文徴など諸アンソロジーは『詩』の流れである。）

（方志立三書議）

昔隋儒王通嘗謂古史有三、『詩』『書』與『春秋』也。臣愚以爲「方志」義本百國春秋、「掌故」義本三百官禮、「文徴」義本十五國風。古者各有師授淵源、各有官司典守。後世浸失其旨、故其爲書、離合分併、往往不倫。然歴久推衍、其法漸著。故唐宋以來、正史而外、有『會要』『會典』、以法官禮。『文鑑』『文類』以仿

風詩。蓋不期而合於古也。

（昔、隋代の碩儒王通は古史には、『詩』『書』『春秋』の三書があるといった。私がおもうに、地方志の義は各国の春秋にもとづき、掌故の義は三百の官礼にもとづき、文徴の義は十五の国風にもとづくものである。古にはそれぞれ師授の淵源があり、それぞれ官吏の職掌があった。後世その主旨が廃れ、書籍自体も機能が錯綜し、往々にしてまとまりがつかなくなってしまった。しかしながら歴史を経るに従って、本来の方法が次第にまた明らかになった。唐宋以降、正史以外に会要・会典ができたのは官礼にのっとったものである。文鑑・文類は国風にならったものである。おそらくは期せずして古に合致したものであろう。）

（爲畢制府擬進湖北通志序）

章学誠を語る際、必ず、取りあげられるのが、すでに見た「吾於史學、蓋有天授。自信發凡起例、多爲後世開山。而人乃擬吾於劉知幾。不知劉言史法、吾言史意。劉議館局纂修、吾議一家著述、截然兩途、不相入也。」という発言であった。章学誠はこれに続けて次のように述べている。

至於史學義例、校讎心法、則皆前人從未言及、亦未有可以標著之名。……吾於史學、貴其著述成家、不取方圓求備、有同類纂。……吾讀古人文字、高明有餘、沈潛不足、故於訓詁考質、多所忽略。而神解精識、乃能窺及前人所未到處。

（史学の義例や校讎の心法についてはすべて前人が言い及ばなかったものであり、まだ何と呼ぶべきかも定まっていない。……私は史学においてはその著述が一家の言となることを尊び、なにからなにまで備わっていること、同様の編纂物があることを求めていない。……私は古人の文章を読んで、高明はあまりあるが、沈潜には不足しており、訓詁や実証には疎かな点が多々ある。しかし全身全霊をもって前人が到達し得なかった点をうかがうことができたのである。）

（家書七）

このような自負をもとに章学誠が取り組んだのが一家の著述でもあると同時に学術の集大成としての『史籍考』編纂であった。それはもとより「考鏡源流」「辨章学術」を具現するものであったはずである。

史離經而子集又自爲部次、於是史書於羣籍畫分三隅之一焉、此其言乎統合爲著録也。……六經流別爲史部所不得不收者也。……子庫之通於史者什之九也。……集部之書又與史家互出入也。蓋史庫畫三之一、而三家多與史相通、混而合之則不清、拘而守之則已隘。

（史が経から離れると子集もまた一分類をなし、こうして史書は羣籍の一隅を占めることとなった。そこでそれらを統合して著録をなすというのである。……六経の流れは史部に収めないわけにはいかないものである。……子部の九割は史に通じる。……集部の書も史部と関係がある。史部は他の三類と区別されるとはいえ、三家は多く史部と通じる部分がある。混雑させて一緒にしてしまえば分類が不明になるし、分類に拘束されれば狭隘におちいってしまう。）

（史考釋例）

『史籍考』は、史としての経、史の経からの独立、そして、子・集への展開という学術史・著述史を企図したものであった。それは、道のあり方を器（またその変遷）からうかがおうとする章学誠の壮大な企てでもあった[九]。その事を端的に示す一文を引用しよう。

余僅能議文史耳、非知道者也。然議文史而自拒文史於道外、則文史亦不成其文史矣。因推原道術、爲書得十三篇、以爲文史原起、亦見儒之流於文史、儒者自誤以謂有道在文史外耳。

（私にできることは文史を論ずることだけであり、もとより道を知るものではない。しかしながら文史を論ずるのに文史を道の外に追い出してしまえば文史は文史でなくなってしまう。それによって道術の源を推し量って、十三篇をなすことができた。文史の淵源をおもんみるに儒家が文史に流れたのであるが、儒者は自らを誤解して道は文史の外にあると考えているのである。）

（姑孰夏課甲編小引）

島田虔次は、「今日では、その『文史通義』が唐の劉知幾の『史通』とならんで、中国の代表的な史学理論の書、歴史哲学の書であることは、もはや定論である。……わたくしは嘗て章の六経皆史を『考証学の哲

学、同時に考証学を越ゆべきことの哲学』と評したことがある。いまとなってはむしろ『考証学を越ゆべきことの哲学、同時に考証学の哲学』というべきであったと思うのであり、……。『六経皆史』は彼の主著『文史通義』を一貫するテーゼであり、その史学思想全部を要約するテーゼであるが、そもそも彼がこのテーゼを掲げたのは、真の史学はいかなるものでなければならぬか、を追求するためであった。」（歴史的理性批判―六経皆史の説―）と述べているが、一家言をなすことを重視する個人の著述という観点からは、六経皆史説はその前史にすぎないし、章学誠の校讎的思考は、考拠のみならず、義理、詞章をも包摂しようとするものであった。島田は、また、「章学誠の性情自得的『史学』は当時の士大夫社会の風気たる考証学（および宋学）を、批判し、包摂し、止揚しようとした。要するに中国学術史の展開を完結しようとした。」（章学誠の位置）とも述べている。ここに「完結」というのは、「六経皆史」説や孔子の位置づけの相対的な引き下げに儒教の軛からの脱却の契機を見出したことや、章学誠の「聖人は衆人に学ぶ」などという発言を清末の龔自珍などが称揚し、新思潮をひらいた点から述べたものであろう。しかし章学誠が著述に求めた意義はあくまでも治道の追求という点にあり、その目指すところは載道説とまったく同様の旧社会のそれそのものであった。章学誠の中国学術史上における意義は、劉歆が『七略』によって古代の学術を総括したのにならって、著述の淵源・沿革を理論の上で総括しようとした点に求めなくてはならないだろう。六経を別格とするものの、全ての著述を史、あるいは史の史的展開ととらえ（自らの著述もその中に位置づけ）ようとしたのである。実践面における集大成を期した『史籍考』は未完におわり、稿本も焼失した。増井経夫は、「章学誠は当時流行していた考拠の学に反撥していた。しかしその理論の根拠は、司馬遷のいう『猶お信を六芸に考う』をそのまま受けてこれを絶対視したところにある。司馬遷が『詩書缺けたりと雖も』といったところを捨ててしまい、個人に完全を認めて、信仰としておさえてしまった。考証学が疑問をいつも持ちつづけたのに、有無を言わせず高飛車に議論を運ぶことになった。自分では刻苦勉励したつもりか知らないけれども、いつも安易

な道を選んでいたのである。」（『中国の歴史書』、刀水書房、一九八四年）とその学問のあり方と成果に厳しい評価をくだす[十]。たしかに先学が指摘するように「六経皆史説」は章学誠にはじまるものではなく[十一]、「古無著述説」も、その根拠は、『論語』の「述而不作」や『漢書』藝文志、『荘子』天下篇などの記述に過ぎず、たわいもないといえばたわいもないものではある。しかし、伝統的学術の考証学的立場からの総決算ともいえる四庫全書編纂の陰に、時流にはずれた一学者の（性情自得的）営為があったこと、そしてそれが四庫全書とは全く異なった形で伝統的学術を総括しようと意図したものであったことは確かである。あらためて中国学術史の厚み、凄みに思いを致さずにはいられない。

注釈

一　中でも特に有名なのは姚鼐（一七三一～一八一五）のものであるが、義理、考拠、詞章の関係は曾国藩なども言及しており、清末まで続いていた。

二　このほかにも、説林には「人之有能有不能者、無論凡庶聖賢、有所不免者也。以其所能而易其不能、則所求者、可以無弗得也。主義理者拙於辭章、能文辭者疏於徴實、三者交譏而未見有已也。義理存乎識、辭章存乎才、徴實存乎學、劉子玄所以有三長難兼之論也。一人不能兼、而咨訪以為功、未見古人絶業不可復紹也。」とあるなど、この類の発言は枚挙に暇がない。

三　たとえば、「報孫淵如書」に、「承詢『史籍考』事、取多用宏、包經而兼采子集、不特如問地理之類已也。……愚之所見、以爲盈天地間、凡渉著作之林、皆是史學。六經特聖人取此六種之史以垂訓者耳。子集諸家、其源皆出於史。末流忘所自出、自生分別、故於天地之間別爲一種不可收拾不可部次之物、不得不分四種門戸矣。此種議論、知駭俗下耳目、故不敢多言。」とあるように、章学誠の手紙には、先人未発という自身の見解とともに、それを他者に漏らさないようにという但書が附されることが多い。

四　これに続いて、「韓子文起八代之衰、而古文失傳亦始韓子。蓋韓子之學宗經而不宗史、經之流變必入於史、又韓子之所未喩也。……拙撰『文史通義』、中間議論開闢、實有不得已而發揮、爲千古史學闢其榛蕪。」とあるのも、章学誠の史学と経学、また韓愈に対する姿勢を示していて興味深い。

五　『文史通義』史德に、「史所貴者義也、而所具者事也、所憑者文也。……非識無以斷其義、非才無以善其文、非學無以練其事、三者固各有所近也、其中固有似之而非者也。記誦以爲學也、辭采以爲才也、擊斷以爲識也、非良史之才學識也。……能具史識者、必知史德。德者何。謂著書者之心術也。……蓋欲爲良史者、當愼辨於天人之際、盡其天而不益以人也。盡其天而不益以人、雖未能至、苟允知之、亦足以稱著

書者之心術矣。」とあり、「志隅自序」には、「鄭樵有史識而未有史學、曾鞏具史學而不具史法、劉知幾得史法而不得史意。此予『文史通義』所爲作也。」とある。

六　たとえば、「學者但誦先聖遺言、而不達時王之制度、是以文為鞶帨繡之玩、而學為鬥奇射覆之資、不復計其實用也。」（史釈）とあるように、これに現実の肯定と治道への関心を加えてもよいと思う。

七　同様の指摘は顧炎武の「不可妄為志状」などにもみられる。

八　このほかにも、「夫既志藝文、當倣『三通』『七略』之意、取是邦學士著選書籍、分其部匯、首標目錄、次序顛末、刪蕪擷秀、掇取大旨、論其得失、比類成編、乃使後人得所考據、或可為館閣讎校取材、斯不失為志乘體爾。」（答甄秀才論修志第一書）、「文選宜相輔佐也。……文有關於土風、人事者、其類頗夥、史固不得而盡收之。以故昭明以來、括代為選、唐有『文苑』、宋有『文鑒』、元有『文類』、明有『文選』、廣為銓次、巨細畢收、其可證史事之不逮者、不一而足。……此文選、志乘、交相裨益之明驗也。」（答甄秀才論修志第二書）という発言がある。

九　「易曰『形而上者謂之道、形而下者謂之器。』道不離器、猶影不離形。後世服夫子之教者自六經、以謂六經載道之書、而不知六經皆器也。」（原道中）、「嗟乎。道之不明久矣。六經皆史也。形而上者謂之道、形而下者謂之器。孔子之作『春秋』也。蓋曰『我欲托之空言、不如見諸行事之深切著明。』然則典章事實、作者之所不敢忽、蓋將即器而明道耳。其書足以明道矣、籩豆之事、則有司存、君子不以是為瑣瑣也。道不明而爭於器、實不足而竟於文、其弊與空言制勝、華辯傷理者、相去不能以寸焉、而世之溺者不察也。太史公曰『好學深思、心知其意。』當今之世、安得知意之人、而與論作述之旨哉。」（答客問）などと述べているように、章学誠の道器論は彼の文史校讎の学とは不可分であるが、これについては改めて別の機会に考察を加えたい。

十　増井経夫はまた、「考証学は一見清朝翼賛の性格をもっていたかにみえる。筆者は多く官僚出身者であり、清朝の安定も不動となっていた。しかし史学における考証をおし奨めればどういう方向が生まれてくるか、ことに文人的思考は自由の萌芽を多分に含んでいるものと、おそらく専制者には感得されたにちがいない。……いや考証学そのものが、本質的には専制の凍結に溶解の穿孔をあける仕事であった。清朝では幾重にも偽装していたが、まず経学を忌避し真実を求めようとしていたし、結局は人間の真実は何かに到達すべきものであった。ただこれを専ら専制に順応するものと見誤ったために、考証学から離脱しようとしたものに、とくに意義を認めようとする出発点ができた。またまさにそれに見合う作品があったのである。考証学全盛の乾隆期に、これに一顧も與えずに史学に理論的な構成を試みたもの、その人は章学誠（一七三八～一八〇一）、その作品は『文史通義』である。」とも述べている。

十一　前篇に記載の参考文献参照のこと。章学誠が直接影響を受けたのは、王陽明『伝習録』上の「以事言謂之史、以道言謂之經。事即道、道即事。春秋亦經、五經亦史。易是包犧氏之史、書是堯舜以下史、禮樂是三代史、其事同、其道同、安有所謂異。」などであろう。